

「安積山影さへ見ゆる……」詠（万葉集・卷十六）について

加藤 睦

一

昨年度（二〇一八年度）、勤務校で和歌のレトリックについての授業を行った。その中で序詞の例歌として取り上げた歌の中に、表題にかかげた、

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに

（万葉集・卷十六・三八〇七）

があつた。^{（↓）}

当初私は、なにしろ有名な歌であるから、すでにその解釈は定まっているものとはばかり思っていて、序詞の典型的な使用例の一つとして説明に使用するつもりであった。けれども、いろいろ調べてみると、上の句が下の句の序詞であるという理解は一致していても、細部には注釈書によっていろいろと揺れがみられることがわかった。さらに、近年、この歌に対して、かなり大幅な読みかえを求める論が複数発表されていることを知った。

以下、授業に際して学んだことを踏まえて、若干の試見を示してみたい。

二

「安積山……」詠について、現在広く読まれていると思われる注釈書の現代語訳と注を抜き出して列挙してみる。（注はそれぞれの著作の書式に関わらず、「*」で項目を立て、省略箇所は「……」で示す。）

○大系

安積山、物の影まで見える山の井のように、浅い心であたのことを思っていないのに。

*影さへ見ゆる―水面に物の影まで映っていること。水の清冽さを示すもの。

*山の井の―……掘井に対して、浅いので、譬喩とアサカの

同音とによって、下の浅キを言い出すための序詞にしたもの。

○集成

安積香山の姿までも映し出す清らかな山の井、浅いその井のよ
うな浅はかな心で、私がお慕いしているわけはありませんのに。

* 安積香山―……上三句は序。「浅き」を起こす。

○新大系

安積山、山影まで見える山の井のように、浅い心で私はあなた
を思わないことです。

* 上三句は序詞。「影さへ」の「さへ」は、原文に「副」と
表記されるように、添加する気持。ここは、眼前に見
る安積山に加えて、その影までもが山の井に映じてい
ることを言う。……

○新編全集

安積山の 影までも見える澄んだ 山の井のように 浅い心で
わたしは思っておりませぬ

* 影さへ見ゆる―山の清水の明澄を示す。

* 山の井の―……以上三句、浅シを起す序だが、アサの同音
繰返しの興味もある。

こうして見ると、山の井に何が映っているのか、「さへ」はどう
いう意味か、水は澄んでいるか、「アサ」という音の反復は意識さ

れているか、の四点に関して、注釈書によって理解が揺れているこ
とが了解される。

さらに近年の注釈書も見てみよう。

○釋注

安積山の影までが映って見える山の井のような浅い心で、私は
思ったわけではないのに。

* 安積香山―……上三句は序。「浅き」を起こす。「山の井」
は湧き出る水で、掘井戸に比べて浅いゆえの序であろ
うが、「安積香山」のアサにも「浅」を見ていよう

* 影さへ見ゆる―山中の井が安積香山を映すことは、国司が
王を迎えたはずの陸奥の国府がどこにあったにしても
あり得ない。陸奥の名山を引きこんで、さような安積
香山をも映し取るほど清らかだという意で「さへ」が
用いられたのであろう。……

○全解

安積山の影までが映って見える山の井のような浅い心で、私は
思ったわけではないのに。

* 影さへ見ゆる―山の影までが映る。「井」の清らかさを表現。
* 山の井の―以上三句、序。……掘り抜き井とは違って、
水を手で掬って飲めるほど浅いので、「浅き」を導く。
「アサカーアサキ」の重なりも意識。

○全歌講義

安積香山の、山の姿までも映って見える山の泉のように、浅い気持であなたのことを思っているわけでは決してありませんの
に。

*安積香山影さへ見ゆる山の井の―「浅き」を起こす序詞。

このように、近年の注釈書においても、アサの音の反復が意識されてきているかという点と、水が澄んでいるかという点については、理解が分かれている。とりあえず前者についていえば、「安積山……浅く」という構成になっている歌から、音の反復を感じるのは自然であって、詠者の何らかの意識をそこから読み取るほうが妥当だろう。

一方、「安積山」と「影」を別物として扱う大系の読み方、実体としての安積山とその影を分ける新大系の読み方は否定され、「安積山の影が山の井に映っている」という理解で一致している。

大系・新大系の解釈は、副助詞「さへ」の表す「添加」という意味を踏まえて、「何に何を添加しているのか」を突き詰めて推測することによってもたらされたものであろう。

けれども、ここでの「さへ」は、小田勝氏が次のように解説する用法に該当するものと考えられる。⁽²⁾

添加の「さへ」は、その表現性において、極端な事物や事態をあげて、「実現可能性の低いものまでも実現している」という、

強い程度を表す表現を作ることがある。

したがって、「影」は「浅香山の影」であると理解して問題ないものと判断される。

多くの注釈書において水の清らかさへの言及が見られるのは、「影さへみゆるは山の井のきよきによりてなり」(契沖・代匠記)の説を淵源とする読解であるが、主想に示される「浅くない心」の比喻としての意味を読み取ることとともに、釋注が記述しているように、「実現可能性の低いものまでも実現している」ことの理由を見出すとしたものである。

釋注は、山の井の水が清らかであるという読解を行いながら、その場合に一首に見出される齟齬について、次のように述べている。

歌は調子のよい、記憶に残りやすい作ではあるものの、上三句「安積香山影さへ見ゆる山の井の」は、水の浅い姿よりも清らかな姿を表わす比重の方がはるかに大きく、第四句「浅き心」との結びつきに違和感が伴う。このことは、「安積香山」の「あさ」に「浅」を感じ取るべきだとしても、変わらない。

ここに示された違和感は、率直かつ妥当なものと思われる。新大系や全歌講義が水の清らかさを読み取っていないのは、こうした違和感が背景にあるものと思われる。

三

木村高子氏は、釋注に記された違和感を肯定する見地から、

伊藤博の指摘のように、この歌は上二句では山の井の清さを、下句では山の井の浅さを詠んでいる、とすれば互いに矛盾してしまうことになる。そもそも「山の井」のような浅き心で「我が思はなくに」という主旨を詠もうとした歌で、山の井の清らかさ、美しさを歌うというのには齟齬があるのではないかと、従来のおおかたの解釈に対して疑問を呈している。³⁾

木村氏はさらに、「安積山：」詠と同様に末句が「我が思はなくに」で結ばれる万葉歌を七首引用して、その構成の特徴を述べ、従来の当該歌の解釈が不十分であることを指摘する。

滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむと我が思はなくに

(卷三・二四二・弓削皇子)

鴨鳥の遊ぶこの池に木の葉落ちて浮きたる心我が思はなくに

(卷四・七二一・丹波大女娘子)

霞立つ春日の里の梅の花間に問はむと我が思はなくに

(卷八・一四三八・大伴宿禰駿河麻呂)

山背の泉の小菅なみなみに妹が心をわが思はなくに

(卷十一・二四七二)

酢蛾島の夏身の浦に寄する波間も置きて我が思はなくに

(卷十一・二七七七)

楽浪の波越す安甞に降る小雨間も置きて我が思はなくに

(卷十二・三〇四六)

佐保川に凍り渡れる薄ら氷の薄き心を我が思はなくに

(卷二十一・四四七八)

木村氏の論を抄出すると以下の通りである。

・これらの歌は、上句からほぼ単一の印象で詠まれ、結句でそれまでの印象を逆転させる歌といえるだろう。これらに照らすならば、安積山の歌のように、一つの事物に対して二つの、それも相反する要素が詠まれているのは異例、ということになるのではないだろうか。

・また、結句の「我が思はなくに」の効果を考えれば、このように私は思っていない、と否定する事物（山の井など）の持つ特性、すなわち否定されるべき特性を明確に示さないことには、最後に否定の意を述べても十分な効果は發揮されないだろう。安積山の歌も他の用例と同じく、上句から「我が思はなくに」で否定されるべき特性、つまり「浅」ということを詠んでい、と考えるべきではないだろうか。

実は、氏がここで同質のものとして引証されている七首の中で、「酢蛾島の：」詠と「楽浪の：」詠は、序詞が下の句全体にかかるものと読むのが正しい。

この二首についての新編全集の解釈と注を引用しておこう。

○酢蛾島の夏身の浦に寄する波間も置きて我が思はなくに

醉蛾島の 夏身の浦に 寄せる波のように 間もあけずに
わたしは思っている。

* 寄する波―以上三句、絶え間ないことよって間置カズ
の比喩の序とした。

○楽浪の波越す安甍に降る小雨間も置きて我が思はなくに

楽浪の 波越す安甍に 降る小雨のように 間も置かず
わたしは思っている

* 降る小雨―以上三句、小雨が絶え間なく降る意で、第四・
五句を起す序となつているのである。

このように、右の二首においては、序詞が下の句の最初のことは「間も置きて」にそのままかかるのではなくて、下の句の主旨全体にかかっていることがわかる。したがって、他の歌とともにこの二首を、「上句からは単一の印象で詠まれ、結句でそれまでの印象を逆転させる歌」として一括することはできない。

ここからわかるのは、序詞を用いた歌において、主旨を示す句が否定表現を含む歌には、主旨の冒頭の表現に序詞がかかっていって、それが否定表現によって覆される型と、否定表現を含む主旨全体に序詞がかかる型と、二つの型があるということである。

木村氏が「安積山の歌も他の用例と同じく、上句から「我が思はなくに」で否定されるべき特性、つまり「浅」ということを詠んでいた、と考えるべきではないだろうか」と述べるのは、「安積山

」詠を、前者の型に属するものとして扱ってきた従来の注釈の系譜を踏襲し、そこに見られる矛盾・齟齬を解消して、一貫した解釈を目指す方向として了解できる。

けれども、その方向に読みを純化させるために、氏が次のように述べることには賛同できない。

・ここで言う「山の井」の「浅さ」とは、掘り井戸と比べた場合の、水面までの「浅」さのことである。今日まで疑問もなくなされてきた「たまっている水の量が少なく、浅い」という、水面から水底までの「浅」さ、つまり水深の「浅」さではない。山の井の場合は、覗き込んだ、その水面が浅いところにあるのである。

・水深の「浅」さで考える限り、「安積山影さへ見ゆる」と「浅き」を結びつける理解はむずかしい。そのため、安積山の影まで見えるくらい澄んで美しい山の井、そんな山の井のような浅い心で私は思っていない、と上下句不調和に解釈せざるを得なかったのではないだろうか。

掘り井戸の水面が地面から見て深い所にあることと対照させ、その差異を取り立ててみれば、なるほどそういうこともありうるだろう。上の句の序詞と、「浅き」との関係を整合的に理解するためによく考えられた読み方といえる。けれども、「安積山」詠のように、単に「山の井」について「浅き」といった場合は、山の井の水の深淺についていわれたものと理解するのがふつうで、そのような

自然な理解を排して水面の位置のことであるとするとするのは、説明を重ねる中でしか発動しない読解と言わざるをえない。

木村氏が「水深の「浅」さで考える限り、「安積山影さへ見ゆる」と「浅き」を結びつける理解はむずかしい」と述べるのは、まっとうな判断である。にもかかわらず、従来の読みを純化して筋を通すことが困難だとすれば、残る選択肢は、「安積山影さへ見ゆる」と「浅き」を結びつけない読解、すなわち、「酢蛾島の…」「楽浪の…」と同様に、否定表現を含む主想全体に序詞がかかる型に属する歌として、「安積山…」詠を読み解くことであろう。

四

右のような選択を試みた読解は、すでに、広岡義隆氏によって次のように示されている。⁽⁴⁾

この歌の主意は下句「浅き心を我が思はなくに」にあり、その下句に冠する序詞として上句がある。この上句は難解である。一般には下句の「浅し」に冠すると理解するが、序が修飾する範囲については認定のむつかしい場合が少なくない。今の場合、「浅き心を我が思はなくに」という全体に冠するものであろう。そうでなかったら序詞にする必要はなく、「安積山」だけの枕詞でよい。古代において、影（姿）を写すことは神秘なものと理解され、その魂まで宿すものと考えられていた。ここはそういう深い井を言うものであろう。古代における井の多くは湧泉

であり、この歌の井も泉をいう。山名もアサだけではなくて、アサカの音は浅からずの否定形を内にもっていると理解してよい。

このように、広岡氏は、「安積山…」詠の序詞を、「浅し」にかかるとする従来の解釈を否定し、下の句全体にかかるものとして読み解いている。この大幅な態度の変更は、その後に刊行された注釈書にも何ら反映されていないようだが、画期的な見解として基本的に肯定すべきであると考ええる。

序詞が特定の言葉ではなく主想全体にかかる歌は、万葉集に限っても、先の二首以外にさらに用例が存在する。それを概観しておこう。

○明日香川川淀去らず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに

(巻三・三二五)

この歌は、かつては、

○大系

明日香河の川淀ごとに立っている霧のやがて消え去るように、心から消え去って行くような淡い思慕の情ではないのです。

○私注

明日香川の川よど毎に立つ霧の消えすぎ行くごとくに、思ひの消えすぎゆくべき恋しさではない。

○窪田評釈

明日香河の川淀を離れずに、そこにのみ限つて立つてゐる霧の、その消え失せるが如くに、我が旧き京師に対する憧れは、思ひの消え失せる、即ち忘れ去るやうなものではないことであるのに。

のように、上の句の序詞が下の句冒頭の「思ひ過ぐ」にかかるとする解釈が一般的であつた。

けれども、その後、当該歌の序詞は下の句の主旨全体にかかるとして読むのが一般的になり通説化している。

今、その判断をていねいに述べているものを二例引用しておく。

○鑑賞

「川淀さらさず」は、川淀毎にの意味ではなく、川淀を離れない状態を表わすだろう。したがって、下句の、

思ひ過ぐべき恋にあらなくに

「思ひ過ぐ」にかかるとはなく、むしろその全体に、言い換えれば「思ひ過ぎず」にかかると見るほうが良いのであろう。

夕方、明日香川の川淀に霧が立ち、そこを去ろうともしない。

その霧のように、自分の思慕の念もたやすく晴れるものではないという、調べも美しい歌である。

○全注

明日香川の川淀を離れず立つ霧がなかなか消えないように、消え失せるようなわが慕情ではないのだ。

*立つ霧の　ここまでの上三句は「思ひ過ぐべき恋にあらなくに」全体の譬喩だと考へる。通説は「思ひ過ぐべき」

を導く序とするが、それならば、「明日香川の川淀を離れず立つ霧でさえやがては消え去るやうに消え失せる」と解さなければならぬ。しかし、「川淀さらさず立つ」とある以上は「霧は消えるもの」という觀念によつて序詞とするわけにはゆかないと考へる。

全注は、序詞と比喩とを峻別する見地に立つての記述であるが、上の句が下の句全体にかかていくという判断をとっている。

万葉集から、序詞が特定の言葉ではなく主旨全体にかかる歌をさらに二首、新編全集の現代語訳、注とともに引用しておく。

○丹波道の大江の山のさな葛絶えむの心我が思はなくに

(卷十二・三〇七二)

丹波道の　大江の山の　さな葛のように　切れる気持など

わたしは持つていない

*さな葛―以上三句、絶えないものの例として第四・五句を起す序。

○高田の野辺延ふ葛の末つひに千代に忘れむ我が大君かも

(卷二十・四五〇八・中臣清麻呂)

高円の 野辺に這い広がる葛の その先々 千代に忘れるよ
うな 先帝ではおわさぬ

*野辺延ふ葛の―以上二句、末長く続き絶えない意によつてかけた序。

このように、序詞が主想全体にかかる用例は、万葉集から一定数見出すことができる。したがって、「安積山…」詠をこれと同様の型に属する和歌として読解する広岡氏の見解は、決して特異なものではない。

けれども、その序詞「安積山影さへ見ゆる山の井の」と主想「浅き心を我が思はなくに」との結びつきについては、広岡氏とは別の説明のし方もありうると考える。

序詞は、自然の景をそれ自体として提示するのが一般的である。先に引用した和歌の序詞、「酢蛾島の夏身の浦に寄する波」「楽浪の波越す安甕に降る小雨」「明日香川川淀去らず立つ霧の」「丹波道の大江の山のさな葛」「高円の野辺延ふ葛の」のいずれも、自然の景を淡々と示している。比喩の序詞が主想に意味的に関わる場合もあるが、それは主想が示されてから事後的に見出される意味である。

このことを踏まえる時、広岡氏が述べる序詞の説明は、下の句の主想を先取りして、それと対応する意味が付与されすぎているからいがある。

「安積山…」詠の序詞は、もっと自然をそれ自体として叙した、即物的なものとして理解するほうがよいのではないか。その「浅さ」「深さ」についても、山の井の水の深淺そのものとして理解すべきであると思う。

平安和歌の和歌では、水の深淺は、次に例示するように、さまざま⁽⁵⁾な趣向によつて表現される。

○水のおもの深く浅くも見ゆるかな紅葉の色やふちせなるらん

(拾遺集・雑秋・一一三三・みつね・「齋院御屏風に」)

○さくらさくこのした水はあさけれどちりしくはなのふちとこそ

なれ

(詞花集・春・三九・源師賢朝臣・「橘俊綱朝臣のふしみの

山庄にて、水辺落花といふことをよめる」)

○おほぞらのかげのみゆるをやまの井のそのふかきとおもひけるかな

(躬恒集・二九二)

○池水のあさくみえしも冬くればこほりはふかきものにざりける

(源順集・二〇二)

「安積山…」詠の序詞も、右の用例の趣向ほど凝ったものではないにせよ、ある種の機知的な取りなしを含んでいるのではないか。「おほぞらの…」詠で躬恒が詠んでみせた、大空が映っているのを見て、山の井の底が深いと思っていたという錯覚と同様に、安積山

の影が映っていることから、山の井は浅いと思われるが、山がそっくりそこに入るほど深いのだという取りなしが行われているものと読むのは、それほど突飛な想像ではないだろう。左注に記された逸話において、「風流たる」采女が、葛城王の機嫌を直すために、「左手に觴を捧げ、右手に水を持ち、王の膝を撃ちて」詠んだ歌としても、ふさわしい理解だと思ふのである。

注

(1) 万葉集からの引用は、新編日本古典文学全集（新編全集と略す）によった。多くの例歌の解釈も、同書のそれを引用するところが多く、学恩に深く感謝したい。他の万葉集の注釈書に言及する際は、左記の略号を用いる。

大系 日本古典文学大系

集成 新潮日本古典集成

新大系 新日本古典文学大系

釋注 万葉集釋注

全解 万葉集全解

全歌講義：万葉集全歌講義

私注：万葉集私注

窪田評釈：万葉集評釈

鑑賞：鑑賞日本の古典

全注：万葉集全注

(2) 『実例詳解 古典文法総覧』（二〇一五年・和泉書院）

(3) 『安積山歌詠考——山の井、などさしも浅きためしになりは

じめけん——』（『成城国文学』24号 二〇〇八年三月）

(4) 『セミナー 万葉の歌人と作品 第十二巻 万葉秀歌抄』（二〇〇五年、和泉書院）

(5) 引用は新編国歌大観による。

（かとうむつみ 本学教授）